毎日新聞
2011年（平成23年）8月10日（水）
世界の鼓動

愛媛で考えたこと

田中 均

今、必要な「則天去私」とは

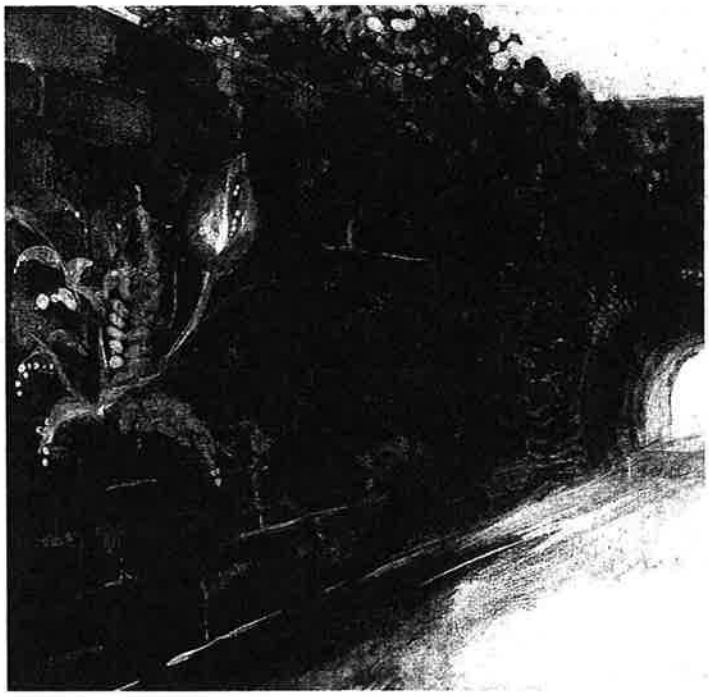
外務省を退官して6年、講演などで地方都市を訪ねる機会が増えた。先日、愛媛県の松山、今治、新居浜を初めて訪ねた。地方の歴史、文化に触れることは本当に楽しみである。完全な城郭建築を残す松山城や日本最古という道後温泉、タオルや造船で有名な今治、そして別子銅山の長い歴史を伝える新居浜。今回の出張でも、地方の魅力を存分に味わえた。

もっとも考えさせられたのは、別子銅山だ。元禄時代に始まり、1973年に閉山するまでの300年近い歴史は、日本の産業発展や企業と地域社会の関係を知る上で貴重である。銅鉱の掘削から精錬、電力供給、鉄道敷設、木材の伐採、町の建設、製品輸送と一大企業群が形成されていった。これが住友グループの源流である。標高750㍍の地に数千人の労働者と家族のための住宅、学校、病院、劇場が建設されて、現在、その一部は深い山間に「東洋のマチュピチュ」と称される姿をとどめている。明治の時代に、一企業がこのような大規模な施設を整備していたのは驚きである。

別子銅山発展の歴史が、煙害や山林破壊といった公害の歴史でもあったことは想像に難くない。煙害を防止するために精錬所を新居浜近くの島に移設して煙の化学処理方策を採り、問題が最終的解決をみたのは1930年代に入ってからという。ただ、今回銅山の跡を訪ねて、鉱脈が掘りつくされた茶褐色の山肌を想像していた私を驚かせたのは、山を覆う成長した木々の緑である。

後に住友家第2代総理事となった伊庭貞剛は、銅山の総支配人だった時、荒れ果てた別子山を見て、「自然に返さなければならない」と誓った。伊庭は、年200万本もの木を植えて、山を自然に戻したという。100年計画だった。この植林は、必ずしも一人の英明な人物の思いの強さだけで実現したものではなかっただろう。当時の企業家は、一企業の利益だけでなく、地域や国家の利益を慮るという気風をもっていたのだと思う。それが、いまだに住友の名前が残っているゆえんかもしれない。

新居浜から松山に旅し、道後温泉本館を訪れた。伊庭が総支配人になった1894年に、この温泉場はできた。その直後、松山中学の英語教師に赴任した夏目漱石もここに通った。当時の雰囲気をそのまま残す「坊っちゃんの間」で、漱石の言葉「則天去私」の文字を見た。小さな私を去り自然に委ねて生きることは、漱石が晩年に到達した境地だと解説されている。



画・onyx

東京に戻ると、どうしても福島第1原子力発電所の事故処理と菅直人首相の退任時期のニュースが目に付く。東京電力は事故処理を終え、廃炉へこぎつけ、この地を自然に戻すための100年の計を考えているのだろうか。原子力発電再開のための「やらせメール」問題も大きく取り上げられたが、今、必要なのは原発推進の行動でもなければ唐突な脱原子力依存の政治声明でもない。拙速ではなく、日本のエネルギー政策や原発の安全策を抜本的に見直していくことだろう。財政再建や社会保障改革についても同様である。

何とか自らの業績を残したいという菅首相の気持ちは解らないではない。だが、今となっては、早急に退任して一刻も早く新しい体制を構築することこそ、彼の使命なのだと思う。漱石が「則天去私」の境地に達したかどうかわからないが、少なくとも漱石は捨てられない自我に悩み、自らを捨て自然に任せる境地に至ることを願った。明治の偉人たちの心意気が現代に戻ってくることを願わずにはいられない。

（たなか・ひとし＝日本総研国際戦略研究所理事長）